

二重目的語構文とその拡張例における意味の違いについて

林 高宣

Takanori HAYASHI

A Semantic Network of the Double Object Construction

[キーワード：二重目的語構文、与格交替、ネットワーク・モデル]

0. はじめに

これまで学校文法では、英語の授与表現が give を用いて2通り可能であるとされるにとどまり、両者の意味論的違いについて指摘されることはあまりなかった。しかし、直接目的語、間接目的語をとる二重目的語構文と二重目的語構文の間接目的語に前置詞 to を付加してもとの直接目的語の後に置く和格構文には明らかに意味論的違いが存在している。本稿では、認知言語学の立場からこれらの構文の意味論的違いを説明し、これらの構文が大学入学前の教育において単なる「言い換え」として双方向に交替可能とされるべきではないこと、同時にこれまで単なる「言い換え」とみなされてきた両者の意味構造について見ていきたい。さらに、中村（2001）による二重目的語構文の意味の抽象化の過程を示し、単一の構文であっても抽象化によって意味を微妙に変化させていること、同時にこれらと構造的、意味論的に関連する構文に注意を向けることが、構文の相互関係の理解を容易なものとし、教育現場における指導と学習が効率的に行われるであろうことを指摘したい。

1. 与格交替

これまで学校文法では、(1a)(1b)のような give, find を含む文において「人」と「物」という2つの目的語(間接目的語/直接目的語)の順序を逆にする場合、(2a)(2b)のように「人」に相当する目的語に前置詞 to/for が付加されると説明されてきた。¹⁾

- (1) a. John gave Mary a diamond ring.
b. John found Mary a good job.
- (2) a. John gave a diamond ring to Mary.
b. John found a good job for Mary.

(1)の構文は二重目的語構文(double object construction)、(2)のように授与の相手を表わす与格をとる構文は与格構文(dative construction)と呼ばれ、(1a)と(2a)、(1b)と(2b)が意味的に対応して交替可能であることを与格交替(dative alternation)と言う。

但し、注意しなければならないのは、与格交替という現象が動詞全般に適用可能なほど広範なものではないということである。例えば、二重目的語構文にしか現れない動詞がある。²⁾

- (3) a. It cost me five dollars.
b. *It cost five dollars {to/for} me.
 - (4) a. I envy you your good luck. (=I envy you for your good luck.)
b. *I envy your good luck to you.
- また逆に、与格構文にしか許されない動詞もある。
- (5) a. John sent a letter to New York.
b. *John sent New York a letter.
 - (6) a. John fixed the radiator for Mary. (ラジエーターを修理した)
b. *John fixed Mary the radiator.
 - (7) a. John opened the door for Mary.
b. *John opened Mary the door.

このように、与格交替という現象は一律にいかなる動詞にも見られるものではなく、むしろ与格交替を示す動詞は、そうでない動詞に比べ少数であると言える。与格交替が多くの動詞において不可能であるということは、(1)と(2)のあいだに見られる交替は特定の場面に限られるものであり、本質的に(1)と(2)を同義と見なすべきではないことを意味していると思われる。二重目的語構文と与格構文という2つの構文が確立しているにもか

かわらず、すべての動詞において与格交替が見られるわけではないという事実は、二重目的語構文と与格構文に意味論的な違いがあり、学校文法における両者の「言い換え」は便宜的なものにすぎないことを示していると考えられる。

以下では、二重目的語構文、与格構文のそれぞれの意味について考察し、与格交替が可能な状況とはいかなる場合であるか見ていきたい。

1.1. 二重目的語構文と与格構文

まず、二重目的語構文の意味について考えてみたい。影山(2001: 133)によれば、動詞 throwは、(8a)に示されるように to, toward, atといった前置詞をとることができるが、toward, at の場合、前置詞の目的語は「目標」を表わすとしか解釈されず、(8b)との交替が不可能となる。

- (8) a. John threw the ball {to/toward/at} Mary.
b. John threw Mary the ball.

影山によれば、(8b)が表わす通常の状況とは、「JohnがMaryにボールを投げた」ということと同時に「そのボールを受け取ることによってMaryがボールの「所有者」になった」ということである。つまり、移動物が相手に渡り、相手が「所有者」になると想定される(あるいはそのように主語が意図する)場合、二重目的語構文が可能となる。³⁾

このように、間接目的語が直接目的語を「所有」するという含意が、二重目的語構文の意味論的特徴であることはこれまでも指摘されており、この含意は間接目的語の性質に対しても制約を課す。⁴⁾通常、間接目的語が「有生」でなければ、それが何かを所有する所有者になるとは考えられず、「所有」の含意は生じない。結果的に、間接目的語が「有生」でなければ、二重目的語構文としては不適格であるとみなされる。

- (9) a. John took the letter to Mary.
b. John took Mary the letter.
(10) a. John took the letter to the mail box.
b. *John took the mail box the letter.

(9a)において、Maryに手紙が届けられることは、手紙が彼女の所有物となることを意味するが、(10b)のように間接目的語が郵便受けの場合は手紙を「所有する」と見なすことができず、(10b)は許されない。⁵⁾さらに、二重目的語構文の間接目的語が「所有者」でなければならぬという制約は、次の例からも理解できる。

- (11) a. John fixed the radiator for Mary.
b. *John fixed Mary the radiator.

- (12) a. John opened the door for Mary.
b. *John opened Mary the door.

(11a)(12a)の与格 for Mary は「~のために」「~の代わりに」と解釈され、John が行為を行うことによってMaryが所有者になるとは考えられない。その結果、二重目的語構文は不可能である。一方、同じ動詞であっても間接目的語が「所有者」になると解釈される場合には二重目的語構文は可能である。

- (13) a. John fixed Mary sandwiches. (サンドイッチを作ってあげた)
b. John opened Mary a beer. (ビールの栓を開けてあげた)

(13a)(13b)はMaryがサンドイッチやビールを受け取って「所有者」となることを意味しており、二重目的語構文として適格である。⁶⁾

このように、二重目的語構文には間接目的語が直接目的語の「所有者」であるという含意が不可欠であり、これが(10)(11)(12)に示されている与格構文と異なる点である。

次に、与格構文の意味について考えてみたい。⁷⁾許諾を表わす動詞 forgive は、二重目的語構文において「所有」の含意を伝えると考えられる。(14a)において、ある意味でMaryは借金の「所有者」であり、動詞 forgive によってその借金を許されたと解釈される。

- (14) a. John forgave Mary her debts.
b. *John forgave her debts to Mary.

しかし、(14b)のように forgive を与格構文に用いることはできない。ここで注意すべき点は、(14b)における前置詞 to の役割である。(9a)(10a)から判断すれば、前置詞 to は直接目的語が主語から間接目的語へと物理的に移動していることを表わしていると考えられる。(14a)における動詞 forgiveは、主語が間接目的語に対して借金を許すという意味であり、間接目的語による「所有」を含意してはいるが、主語による許諾の結果、その所有物が主語から間接目的語へと「移動」するわけではない。そのため、(14b)は to- 与格構文として不適格と判断される。つまり、to- 与格構文が成立するためには直接目的語の「物理的移動」が要求されるのである。(15)(16)も to- 与格構文が「物理的移動」を表わすと考えることが適切であることを示している。

- (15) a. *Lipson's textbook taught Russian to me.
b. Lipson's textbook taught me Russian.

- (16) a. *Mary's behavior gave an idea to John.
b. Mary's behavior gave John an idea.

(15a)(16a)において、無生物である主語から間接目的

語に向かって何かが物理的に移動するとは考えられない。(9a)(10a)のように主語が有生であれば、その主語によって何かが物理的に移動することは可能であるが、無生物の主語にそのような行為を行う能力は備わっていない。そのため、(15a)(16a)において to- 与格構文は許されない。これに対して、(15b)(16b)のような二重目的語構文では主語が無生物であっても、間接目的語が直接目的語を「所有する」ことが可能なため、適格であると判断される。⁸⁾

以上の議論から言えることは、to- 与格構文においては直接目的語の「物理的な移動」という解釈が必要であり、二重目的語構文においては間接目的語が直接目的語を「所有する」という含意が伝えられなければならないということである。

(17) a. Mary gave an idea to John.

b. Mary gave John an idea.

(17a)では主語が動作主であり、Mary が John にアイデアを与えたという「移動」の解釈が成り立つ。(17b)ではMaryの「行為」が原因となって John にアイデアがひらめいたという解釈と、Mary が実際に John にアイデアを与えたという解釈の両方が可能であるが、どちらの場合にも John がそのアイデアを「所有する」ことになる。このように、同じ動詞に対して両方の構文が許される場合、二重目的語構文は「所有」の含意を伝えており、与格構文は「物理的移動」を伝えている。結果的に、与格交替とは、二重目的語構文において間接目的語が直接目的語を「所有」するという含意を伝え、与格構文においては直接目的語の「物理的移動」を伝えるという、2つの条件がともに成立する、ごく限られた場合に可能となる現象であると結論される。多くの場合には主語や間接目的語の性質、動詞の意味から両構文において必要とされる解釈が成立せず、与格交替は不可能となる。

1.2. 二重目的語構文と与格構文の認知構造

すでに見たように、二重目的語構文には間接目的語が直接目的語を「所有する」という含意があり、to- 与格構文には直接目的語の「物理的移動」が意味されなければならない。それではなぜ、これまで学校文法において両者が単なる「言い換え」として説明されてきたのだろうか。それは、両者が厳密には異なる意味を表わしているものの、端的に言えば共通する部分を持つからである。以下に認知文法の立場から両者の認知構造を示し、その違いがどのように捉えられるか、さらに何が両者に共通する部分となっているのか見ていこう。

認知文法では、二重目的語構文(18a)と to- 与格構

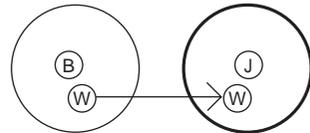
文(18b)の認知構造はそれぞれ(19a)(19b)のように表わされる。ここで注意すべき点は、(19a)(19b)はともに動作主(B)が被動作主(W)を自分の所有領域から Joyce の所有領域へ移動させるという事態を表わしているということである。つまり、(19a)(19b)は同一のベース(base)に基づいていると言うことができる(ここで言うベースとは、figure-ground という対立の中で ground に相当する部分である。figure に相当する際立った部分はプロファイル(profile)と呼ばれる)。

(18) a. Bill sent Joyce a walrus.

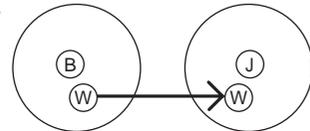
b. Bill sent a walrus to Joyce.

(Langacker 1986:14)

(19) a.



b.



この「同一のベースに基づいている」という事実によって、二重目的語構文と to- 与格構文は学校文法において単なる「言い換え」と見なされてきたのである。認知プロセスが形式に反映されるとする認知文法では、両者は同じ意味を表わしてはいないのであるが、ベースが同一であるということは、客観的事態として、あるいは真理条件の意味論の立場から同じ内容を伝えていることになるのである。

一方、認知文法では、これまで説明してきた二重目的語構文と to- 与格構文の具体的な違いは次のように説明される。どちらの構文においても Bill がトラジェクターとして選択されているが、(18b)では被動作主であるセイウチをランドマークとして選択し、セイウチの移動がプロファイルされているのに対し、(18a)では Joyce をランドマークとして選択し、Joyce を参照点とした所有領域全体がプロファイルされている。⁹⁾つまり、認知文法においては二重目的語構文では Bill の所有領域が際立ち、to- 与格構文ではセイウチの移動が際立つということになる。

二重目的語構文と to- 与格構文のプロファイルの違いがあり、結果的に両者が同義でないことは先の例に加えて次の例からも明らかである。

- (20) a. Bill sent a walrus to Joyce, but she didn't receive it.
 b. ?Bill sent Joyce a walrus, but she didn't receive it.

(20b)において前半の二重目的語構文では、Joyceの所有領域がプロファイルされており、「セイウチはJoyceの所有領域にある」という所有関係が含意されなければならないが、後半部分がこの含意を否定するため、(20b)は意味論的に矛盾を生じ、不適格となる。一方、to-与格構文では、Billの所有領域からJoyceの所有領域への「セイウチの移動」のみがプロファイルされるため、Joyceがセイウチを「所有する」という含意が構文の意味論的特徴上存在せず、(20a)のように所有関係が否定されても問題ない。

また、(21)における与格交替の可否も両構文の意味論的な違いから説明される。

- (21) a. I sent a walrus to Antarctica.
 b. ?I sent Antarctica a walrus.
 c. I sent the zoo a walrus.

(Langacker 1986: 15)

(21a)と(21b)は通常、与格交替とみなされる例であるが、(21a)が適格であるのに対して(21b)は不適格である。to-与格構文である(21a)は主語Iから南極へのセイウチの移動の経路をプロファイルするため問題なく受け入れられるのに対し、(21b)では南極の所有領域がプロファイルされ、「セイウチは南極の所有領域にある」という所有関係が含意されなければならないにもかかわらず、場所が所有者になるとは考えにくいことから不自然と解釈される。この解釈は(21c)の適格さも説明する。一見したところ(21c)では、(21b)と同様に場所が所有者になっており、所有の含意を伝える解釈は不自然であるように思われる。しかし、動物園というのは1つの組織体をなしており、有生ではないにせよ、それが動物の所有者になることは自然であると考えられる。その結果、(21c)は「所有」の含意を伝え、適格とみなされる。

さらに、二重目的語構文における「所有」の含意によって、(22a)(22b)ではthe governmentの解釈に違いが生じる。

- (22) a. John sent the letter to the government.
 b. John sent the government the letter.

to-与格構文である(22a)におけるthe governmentは、先の(21c)におけるthe zooと同様に何かを「所有する」ことができる団体・機関を指すと解釈されると同時に、施設あるいはその所在地を指すと解釈することもで

きる。これに対し、二重目的語構文である(22b)では、(22a)における最初の解釈しか存在しない。これは、先に述べたように二重目的語構文の意味から「所有」の含意が伝えられなければならない、政府というものを施設あるいはその所在地と解釈する場合、この含意が許されないからである。

(23b)のto-与格構文が許されないことも、二重目的語構文とto-与格構文の意味論的な違いを示している。

- (23) a. I gave the fence a new coat of paint.
 b. ?I gave a new coat of paint to the fence.

二重目的語構文である(23a)では、所有とまでは言えないにせよ、ペンキを塗ることによってペンキが壁の一部となっていると考えられてよく、「部分-全体」という関係が二重目的語構文の「所有」の含意と矛盾しない。これに対し、(23b)の場合、ペンキの移動の経路がプロファイルされることになるのであるが、我々が「壁にペンキを塗る」という事態を描写する際に、ペンキの移動をポイントとして事態を描写する、つまりペンキが壁へと移動するだけで壁の一部とならないという事態を描写することはあり得ないと考えられ、(23b)は現実起こり得る事態について述べているとは解釈できない。

このように、二重目的語構文とto-与格構文の意味は、同じベースに基づいて説明されるため、学校文法において両者は単なる「言い換え」としてこれまで説明されてきた。しかし、それぞれの構文のプロファイル部分の違い(to-与格構文では目的語の移動経路がプロファイルされ、二重目的語構文では間接目的語の所有領域がプロファイルされる)によって、両者は異なる構文、つまり意味論的に異なる構文として扱われる必要がある。¹⁰⁾

2. ネットワーク・モデル

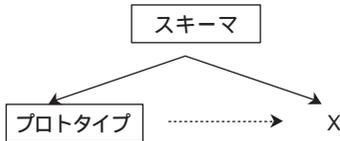
認知文法の立場から、二重目的語構文と与格構文はベースを同じくしているが、そのプロファイル部分が異なると説明される。両者が同じベースに基づいているという事実によって、これまで両者は学校文法において交替可能な「言い換え」と見なされてきたが、以上に示したように二重目的語構文では直接目的語が間接目的語の「所有物」であるという含意が伝えられ、間接目的語の所有領域がプロファイルされていた。一方、to-与格構文では直接目的語の物理的な移動が伝えられ、その認知構造においては主語の所有領域から間接目的語の所有領域への直接目的語の「移動」がプロファイルされていた。この節では、以上の2構文のうち二重目的語構文における意味の抽象化を中村(2001)に従って見ていく。

2.1. 語彙ネットワーク

二重目的語構文と与格構文、さらにはそれらに意味論的、統語論的なつながりを持つ構文の関係を説明する前に、語の多義性を説明する語彙ネットワークについて見てみよう。これによって同様の関係が構文のあいだにも見られることが理解できる。

認知文法では、事物や事象の同定 (identification) や差異化 (differentiation) を行い、共通性や関係性に基づいて一般化 (generalization) することをカテゴリー化と呼ぶ。そして、概略化 (schematization) と拡張 (extension) というカテゴリー化関係によって節点 (node) がリンクされるような構造を持つ、カテゴリー化のモデルを「ネットワーク・モデル」と呼ぶ (Langacker 1991)。このうち概略化とはスキーマに基づくカテゴリー化であり、拡張とはプロトタイプに基づくカテゴリー化である。

(24)

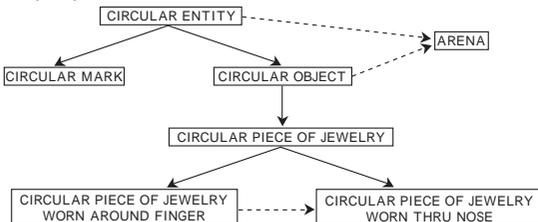


(Langacker 1990: 271)

(24)において、プロトタイプに基づくカテゴリー化では、ある対象 x はプロトタイプからの拡張であり、スキーマに基づくカテゴリー化では、x はプロトタイプとともにスキーマの具体化である。このような2つのカテゴリー化が可能となる理由は、人間にプロトタイプからの拡張を動機づける類似性を発見する能力と特定化されたものからスキーマを発見する能力の両方が備わっているからである。

スキーマによるカテゴリー化とプロトタイプによるカテゴリー化によって語の多義性が説明される。名詞 ring の複数の語義はこれらのカテゴリー化によってネットワークを形成している。

(25)



(Langacker 1988: 52)

(25)において、[CIRCULAR ENTITY]は [CIRCULAR

MARK][CIRCULAR OBJECT] にとってのスキーマであり、ring の最も基本的な意味である。一方、[CIRCULAR MARK][CIRCULAR OBJECT] は [CIRCULAR ENTITY] の具体化であると考えられる。これらはすべて ring という語によって表わされる。さらに、[CIRCULAR OBJECT] は [CIRCULAR PIECE OF JEWELRY] のスキーマであり、後者は前者の1つの具体化である。[CIRCULAR PIECE OF JEWELRY] のさらなる具体化として [CIRCULAR PIECE OF JEWELRY WORN AROUND FINGER][CIRCULAR PIECE OF JEWELRY WORN THRU NOSE] があり、この関係においては [CIRCULAR PIECE OF JEWELRY] が後者2つのスキーマとなっている。また、ring はボクシングのリングを指す場合もあるが、リングは円形でないため、[CIRCULAR ENTITY][CIRCULAR OBJECT] の具体例ではなく、それらをプロトタイプとした拡張例と見なすことができる。

このように1つの語に対し複数の語義を定義するのではなく、様々な語義はスキーマの具体化であったり、プロトタイプからの拡張であると考えて、語の多義性を説明するのが認知文法の立場である。

2.2. 認知プロセス

語彙と同様のことが構文についても言える。但し、中村 (2001) によれば構文の場合、ネットワークが形成されていることを認識するには記述される事態がどのように認識されているかという認知プロセスを考慮する必要がある。認知文法において、意味とは、客観的な記述内容 (真条件の意味内容) のみでなく、意味内容を構築する際に我々が利用した認知プロセスを含んでいると仮定される。これを動詞 rise について見てみよう。

通常、rise は物体の上への移動を表わす動詞であると説明され、(26a)を見る限りにおいてこの説明は適切である。

- (26) a. The kite rose higher and higher.
- b. The hill rises gently from the bank of the river.
- c. The sun rises in the east.

しかし、中村 (2001) が指摘しているように (26b) における「丘の形状を記述する rise」の用法をこの意味規定で説明することはできない。中村によれば、(26b) の意味内容を構築する際には「視線の上昇」という認知主体の認知プロセスが働かなければならない。丘の傾斜を捉える際に認知主体は自らの視線を上昇させることによって意味を構築している。この認知プロセスを考慮すれば (26a) も同様に説明することができる。我々は動

詞 rise による意味内容を構築する際、実際に対象物が上昇しているか否かを問題とするのではなく、「視線の上昇」が存在するか否かを重要視しているのである。現実には動いていない太陽に対して(26c)の表現が可能(26b)同様に「視線の上昇」から説明できる。地球と太陽の物理的な位置関係がいかなるものであろうとも、「視線の上昇」という認知プロセスを伴って太陽の位置変化が動詞 rise によって表現される。

ところが、認知プロセスによって捉えられた具体的な叙述内容のみを表わしている語彙的要素の場合とは異なり、文法的要素は次第に認知プロセスによって捉えられた叙述内容を表わさなくなり、最終的には認知プロセスのみを反映するようになる。¹¹⁾ 文法的な用法へと拡張した have 構文における have には具体的な叙述内容がないため、「所有する」という意味を持つ動詞 have との間に共通点を見出すためには、両者に共通する認知プロセスを特定するしかない。

(27) a. John had his purse stolen.

b. John had his hair cut.

(27a)(27b)はhave 構文として「被害」「恩恵」を表わしているが、動詞have の持つ「所有する」という意味はない。「所有」という意味を持つ動詞 have とこれらの構文に共通するのは人と出来事が「近い関係」にあるということ捉える認知プロセスである(Langacker 1993, Dabrowska 1997)。 (27)において、「誰かが John の財布を盗んだ」あるいは「John の髪を切った」という事態が John と認知的に近い、つまり John を参照点として John に財布が盗まれるというような事態が生じたということが述べられている。「被害」や「恩恵」は、人と事態を近いと感じさせる具体的な要因であり、「所有」を表わす have との共通点、すなわちスキーマである。このように、構文の場合には具体的な叙述内容がないため、スキーマ的な認知プロセスに注目しなければネットワークに気づくことはできない。

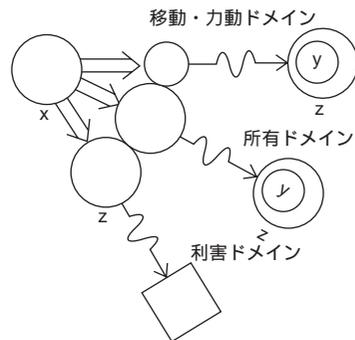
2.3. 二重目的語構文の意味の抽象化

以上のような認知プロセスに注目し、中村(2001)は二重目的語構文が抽象化する過程を示している。二重目的語構文も具体的な記述内容を持ったものから次第に認知プロセスのみを示すスキーマ的なものへと変化し、結果的に二重目的語構文という1つの構文においても多様性を示すようになる。もちろん、この抽象化の過程は通時的なものである必要はなく、現在の二重目的語構文においてそのあらゆる段階を有している。ここでは、二重目的語構文の抽象化の過程とそれぞれの過程の二重目的

語構文がリンクしていることを見ていきたい。

この過程を捉えるためには、認知文法における複合マトリックス (complex matrix) という考え方にふれておく必要がある。例えば、「ナイフ」が表わす意味は、その材質、形状、機能の総和から構成されている。複合マトリックスとは、記述内容が「材質領域」「形状領域」「機能領域」といった複数のドメイン内での特性記述の総和であるとする見方である (Langacker 1990: 5)。二重目的語構文 x sends z y . の意味内容も同様に、移動ドメイン (x から y が z へ移動する) 力動性ドメイン (x が y に働きかけて y を移動させる) 所有ドメイン (z が y の所有者になる) 利害ドメイン (z が恩恵や利益を受ける) という4つのドメイン内での特性記述の複合マトリックスとして与えられる (Newman 1996)。

(28)



(28)において、水平方向の関係は「 x から y への働きかけ」と「 y が z へ移動する」という、力動ドメインと移動ドメインの複合マトリックスを表わしている。¹²⁾ その下に示されている関係は所有ドメインを表わし、ここでは「 x が y を送る」ことによって「 z が y の所有者に変化する」ことが示されている。最後の関係は利害ドメインを表わしており、「 x が z に働きかける」ことにより「 z が利益や恩恵を受ける」という状態変化を被ったことを表わしている。但し、中村の説明では、二重目的語構文の意味の抽象化に全てのドメインが常時関係するわけではなく、抽象化の過程でプロファイルされるドメインと共にプロファイルされないドメインが存在したり、あるドメインが消失したりする。中村は個々の動詞の意味と構文の意味とは本来別のものであるというGoldberg(1995)と同様の立場をとり、二重目的語構文の意味の抽象化を示している。

中村は、二重目的語構文の抽象化の過程のほぼ全てを表わすことができる例として(29)を挙げている。

(29) Nixon gave Mailer a novel. (Oehrle 1976)

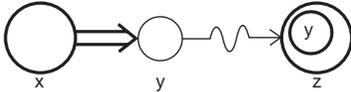
Nixon が Mailer に小説を手渡した。

Nixon が Mailer に小説を譲渡した。

Nixon (のベトナム政策) が Mailer に小説を書かせた。

中村によれば、現在では二重目的語構文において頻繁に現われる動詞 give, send も本来的には (28) における移動・力動ドメインの認知構造のみを表わしていた。この段階では、二重目的語構文の移動・力動ドメインにおける認知構造 (つまり構文の意味) が give, send の表わす「移動」という動詞の意味と一致することになり、二重目的語構文におけるその他のドメインにはプロファイルが与えられない。

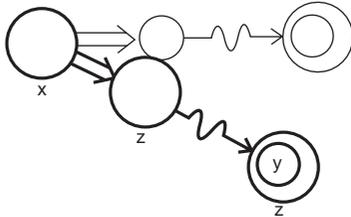
(30)



ここでは、「xからのエネルギーがyに伝えられる」ことによって「yがzへ移動した」こと、つまり動詞の表わす「移動」という意味が、二重目的語構文における移動・力動ドメインと一致し、このドメインのみにプロファイルが与えられることになる。

次に、(31) では新たに所有者の変化を表わす所有ドメインが分化しているが、移動・力動ドメインも同時に存在している。

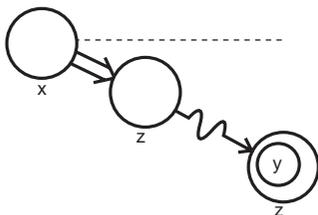
(31)



の解釈では、移動・力動的意味が明白であるが、Mailer が本を受け取って自分の物にしたかどうかは特定されていないため、その認知構造は (30) か (31) であろうと中村は言う。

さらに、認知構造 (32) では所有ドメインのみが存在し、移動・力動ドメインは消滅している。

(32)



(31) から (32) へ移行する過程で二重目的語構文は所有ドメインのみの認知構造を有するようになるが、この段階で二重目的語構文は give, send の移動・力動ドメインの意味から独立し、作成動詞、獲得動詞へとその用法が拡張されることになる。¹³⁾ (32) の具体例として中村は (33b) を挙げている。

(33) a. Mary gave John a long look.

b. Mary gave John a look at her etching.

(Green 1974: 84 (b) のみ)

(33a) では Mary から John への視線の移動があり、移動・力動ドメインの認知構造が関わっているが、(33b) では John がエッチングを見るのであり、Mary から John へと移動するものはない。の解釈では、具体的な移動は不明であるが、所有権の移動は明白であるから、(31) か (32) の意味となる。

さらに、二重目的語構文の主語は無生物でもよい。

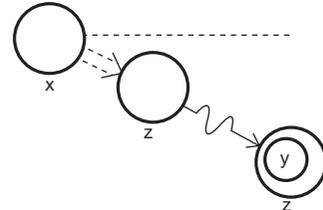
(34) a. Mary's behavior gave John an idea.

b. Music gives most people pleasure.

c. Does your back give you pain?

これは、xからyへの働きかけが具体性をなくし、(35) のように使役性がさらに抽象化されていることを示している。

(35)



の解釈では、所有権の移動はなく、括弧内の説明から分かるように働きかけも抽象的であるから、(35) に近い。このように、意味の抽象化は連続的であり、その過程のどこかに特定の意味が位置づけられている。¹⁴⁾

以上のように二重目的語構文の意味の多様性は、認知構造 (30)(31)(32)(35) がリンクしていると仮定することによって説明される。そして、認知構造 (31)(32)(35) から明らかなように二重目的語構文のスキーマは間接目的語がその所有領域に直接目的語を含んでいることである。このように二重目的語構文は認知構造 (35) をスキーマとしてその具体化である認知構造とネットワークを形成しているのである。二重目的語構文という同じ形式をとりながら、微妙に異なる意味を表わす場合があるのは、直接目的語が間接目的語の所有領域にあるという部分を除いて、それらの認知構造が少しずつ異なるからであると説明される。

3. 継承リンク

二重目的語構文の基本的な意味は同じであるが、以上のように抽象化によって複数の解釈が可能となる。さらに、中村はこれらの認知構造が他の構文と複合リンクを形成すると仮定している。ここでは、さらに、二重目的語構文、与格構文とその他の構文における継承リンクについて説明したい。このような関係を整理することで、それぞれの構文の意味論的な違いについての認識、そしてこれらの構文の理解がより容易になると思われる。

中村(2001)によれば、二重目的語構文と他の構文が複合リンクを形成する領域は移動・力動ドメインと利害ドメインである。ここでは、両方のドメインにおいて二重目的語構文とその他の構文の関係について見ていきたい。但し、いかなる場合に構文と構文がリンクしているのかという問題について本稿は中村と異なる立場をとるため、これについて以下に説明したい。

3.1. 移動・力動ドメインにおけるネットワーク

中村によれば、移動・力動ドメインにおいてリンクを形成する構文は、移動使役構文、to-与格構文、二重目的語構文の認知構造(30)である。移動使役構文とは、動作主が移動体に何らかの働きかけをして、それを着点まで移動させることを表わす(36)のような構文である。

- (36) a. John moved the table to the corner.
 b. They laughed the poor guy out of the room.
 c. Frank sneezed the tissue off the table.

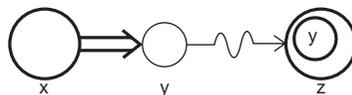
これらの構文はいずれも目的語の移動のみを表わしている。これに対して、to-与格構文では、所有しないまでも(37)のように移動する移動体を受け手が受け取ると考えられる。

- (37) John sent a book to Mary.

移動使役構文では移送の着点が無生であるため、受け取ることにはできないが、to-与格構文では着点の有生であり、受取手になることができる。中村によれば、これら2つの構文のプロファイルの中心は移動・力動ドメインにおける目的語の移動である。一方、与格構文に対応する二重目的語構文(38)では、間接目的語が直接目的語を所有することが含意され、結果的に(38)では、Johnの所有領域とその中にあるa bookがプロファイルされる。

- (38) John sent Mary a book.

(39)



但し、構文Aが構文Bとリンクするという場合、構文Aは構文Bから統語的、意味的な情報を継承していなければならない。¹⁵⁾ Goldberg(1995)は、継承リンクのタイプとして、構文の中心の意味からの意味拡張を捉える「多義性のリンク」、ある構文がそれとは独立して存在する別の構文と全体-部分関係を結ぶことを指す「部分関係のリンク」、ある構文とそれを具体化した構文との間に成り立つ関係を指す「具体例のリンク」、「メタファー的拡張リンク」の4つを挙げている。中村は、to-与格構文として純粋に「物理的移動」を示すものしか挙げていない。これらは実際に直接目的語が間接目的語へ向けて物理的に移動しているため、移動使役構文の具体例と見なしてよいと思われる。結果的に、to-与格構文は移動使役構文と具体例のリンクによって結ばれることになる。

また、to-与格構文にはGoldberg(1995)が移送の移動使役構文と呼ぶ(40)のような例も含まれる。

- (40) a. The judge awarded custody to Bill.
 b. Joe gave his house to the Moonies.

これらの例では直接目的語の「物理的移動」は生じていないが、メタファー的拡張リンクによって移動使役構文と結びつけられている。例えば、結果構文‘Joe kicked Bob black and blue.’は「状態変化は位置変化」というメタファーによって移動使役構文‘Joe kicked the bottle into the yard.’と結びつけられている。同様な関係が移動使役構文と移送の移動使役構文にも当てはまる。2つの構文は「所有の移送は物理的移送」というメタファー的拡張リンクによってリンクされると考えられる。そのため、(40)のような例も移動使役構文とリンクしていると見なすことができる。

しかし、1節での議論から明らかのように二重目的語構文の認知構造(30)と与格構文がリンクを形成しているとは言えない。中村(2001)は意味論の情報のみから二重目的語構文と与格構文がリンクを形成していると述べているのかもしれないが、二重目的語構文と与格構文は以上に示されたリンクのいずれも形成してはならず、両者はリンクしていると見なされるべきではない。これまで見てきたように二重目的語構文と与格構文の認知構造は異なるものであり、本稿では両者はリンクを形成していないという立場をとる。二重目的語構文の認知構造において移動・力動ドメインが

存在してもよいが、そこにプロファイルが与えられていると仮定することには問題があるかもしれない。二重目的語構文の認知構造は認知構造 (30) からではなく認知構造 (31) から意味の抽象化が進むと仮定すべきである。

このように、移動・力動ドメインにおいて移動使役構文は「物理的移動」を表わす to- 与格構文、さらに移送の移動使役構文とリンクしている。しかし、二重目的語構文との関係は Goldberg の言う意味論的に同義、つまりベースを同じくしているが、二重目的語構文が移動・力動ドメインにおいてプロファイルされるべきでないことから移動使役構文や to- 与格構文とリンクを形成していないと思われる。

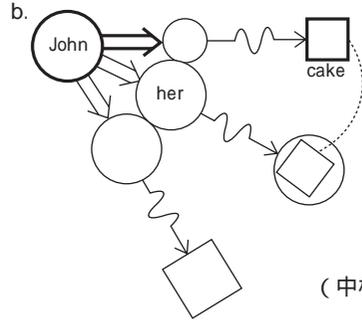
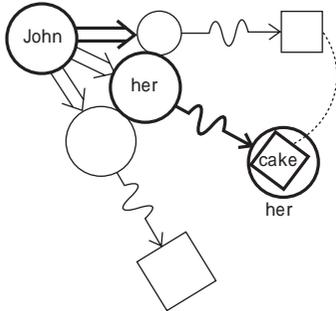
3.2. 利害ドメインにおけるネットワーク

次に、動詞 bake のような作成動詞を含む二重目的語構文とそれに対応する for 与格構文、さらに 他動詞+ for 前置詞 構文は、利害ドメインにおいてそれぞれの関係が示されている。¹⁶⁾しかし、上に挙げたリンクの可能性から判断して二重目的語構文の認知構造 (32) と for- 与格構文もベースを同じくしてはいるが、構文間リンクを形成していないと考えられる。

まず、最初に二重目的語構文と for- 与格構文の認知構造について見ておこう。¹⁷⁾ to- 与格構文では動詞の目的語の「物理的移動」が意味されていなければならないが、for- 与格構文では基本的に動詞が表わす行為によって何かが創り出されるという「作成」の意味が伝えられなければならない。与格構文において何かが作成され、二重目的語構文において間接目的語が直接目的語を「所有する」という含意が伝えられる場合に与格交替が可能となる。¹⁸⁾ (41a) の認知構造は (42a) であり、(41b) の認知構造は (42b) である。

- (41) a. John baked her a cake.
- b. John baked a cake for her.

(42) a.



(中村 2001: 84)

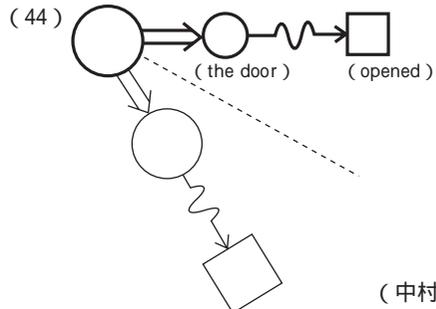
二重目的語構文 (41a) では (42a) に示されているように所有ドメインの意味内容がプロファイルされるが、主語からのエネルギーは材料に達し、受取手へのエネルギーはプロファイルされない。これは動詞 bake の本来の意味であり、二重目的語構文本来の認知構造 (31) と異なる点である。一方、for- 与格構文 (41b) では、所有ドメインの意味内容はプロファイルされず、ケーキを作るという作成行為 (移動・力動ドメインに相当するドメイン) がプロファイルされている。つまり、for- 与格構文では焼き手がケーキの材料に働きかけて、ケーキへと変化させる過程のみが表わされている。このように、移動・力動ドメインの複合マトリックスで表わされる認知構造は動詞 bake の作成の意味しか示しておらず、Mary がケーキを所有するであろうこと (所有ドメイン) しかもそれによって Mary が恩恵や利益を受けるであろうこと (利害ドメイン) は明示されていない。

ここでも、二重目的語構文と for- 与格構文はベースを同じくするが、継承リンクは形成されていない。

さらに、for 前置詞句をとっていても、次のように二重目的語構文との交替をしない 他動詞+ for 前置詞句構文がある。

- (43) a. *He opened me the door.
- b. He opened the door for me.

(43b) の文意から明らかなように、授受は含まれないため、この構文の認知構造は、次のように所有ドメインを欠くことになる。



(中村 2001: 85)

英語の二重目的語構文では、間接目的語は直接目的語の所有者でなければならないため、所有ドメインを欠く他動詞+ for 前置詞句 構文は二重目的語構文の認知構造(31)とリンクを形成してはいない。しかし、(43b)は for- 与格構文と具体例のリンクを形成していると考えられる。具体例のリンクとは先にも述べたように、ある構文が他の構文の「特殊例」(special case)である場合を指す。特定の語彙項目がある構文にのみ生じる場合、その構文に結びつく統語構造や意味を語彙に継承しているため、その構文の具体例であると言える。

注

1)(2)のように直接目的語に相当する語句が間接目的語より前に来る場合、間接目的語に付加される前置詞は to か for であり、to, for 以外は極めて少ない。

- (i) a. I asked him a question./I wish to ask you a favor.
b. I asked a question of him./I wish to ask a favor of you.

2) 影山 (2001: 130) によれば、(i) の動詞について日本語の英和辞書では to- 与格構文との書き換えが可能とされる場合もあるが、現在の (イギリス) 英語では主に二重目的語構文のみで使われる (Collins COBUILD English Grammar p. 161)。

- (i) a. I wish you good luck.
b. Mary allows her son only five dollars a month.
c. The bank refused the company a new loan.

3) 影山 (2001: 133) は次の例を引用し、必ずしも「所有」が成立しなければならないわけではなく、「意図」されていればよいと説明している。

- (i) It took two weeks to mail Charles a letter in Alaska.
(ii) It took two hours to mail Charles a letter at the post office.

(Tenny 1987: 233)

(i) は「手紙が届くまで2週間かかった」という意味を表わし、Charles は手紙の「所有者」であるが、(ii) は「Charles宛ての手紙を郵便局で出すまで2時間かかった」という意味であり、Charles が手紙の「所有者」になったことは明示されていない。しかし、Charlesが手紙を受け取ることを意図して行為が行われているため、二重目的語構文が可能となると影山は言う。promise, offer, guaranteeのように将来の所有転移を表わす動詞も同様であり、約束した時点では「所有」は成立していないが、

発話時点では、その成立が意図されている。

(iii) The employer promised them a pay raise.

4) 与格構文が二重目的語構文と交替する際に含意される「所有関係 (possession) の発生」は Pinker 1989, Gropen *et al.* 1989, Goldberg 1989, 1992 にも指摘されている。

5) 「物理的移動」と「所有関係の転移」の区別は微妙な場合があり、話者・方言によって差異が生じる (影山 2001: 134)。throw, toss, kickなどの動詞が二重目的語構文に現われるのに対して、carry, pull, push, lowerなどでは二重目的語構文を許す話者 (Green 1974, Levin 1993, Tenny 1987) と、許さない話者 (Gruber 1965, Pinker 1989, Gropen *et al.* 1989) に分かれる。

- (i) a. John {threw/tossed/kicked} Mary the ball.
b. John {threw/tossed/kicked} the ball to Mary.
(ii) a. %John {carried/pulled/pushed} Mary the ball.
b. John {carried/pulled/pushed} the ball to Mary.

(%は話者によって違いがあることを示す。)

(ii) a) を認めない Pinker (1989), Gropen *et al.* (1989) によれば、throw, toss, kickなどのように移動のきっかけを与える行為 (ballistic motion) を表わす動詞は二重目的語構文をとれるが、carry, push, pullのように主語が移動物といっしょに連続的に動いていく場合 (continuous motion) には二重目的語構文をとれないとしている。carryなどの動詞は連続的な移動に意味論的重点を置くため、移動物が相手の所有物になるということをつたえにくいからである。一方、同じ連続的移動を表わす take, bring が二重目的語構文をとることができる理由について、take, bring はその語彙の意味の一部として着点を定めているため、所有関係の転移が語彙的に含意されているからであると影山は述べている。

6) 影山 (2001: 138) は (i) に対して同様の説明を行っている。

- (i) a. John sang the song for his dead brother.
b. *John sang his dead brother the song.

影山によれば、(ia) は「亡くなった兄のために (慰霊に) 歌を歌った」という意味であり、his dead brother がその歌を聞いたかどうか (つまり、亡くなった兄が「所有者」になったこと) については述べていない。一方、(ib) は二重目的語構文であるため、his dead brother と the song の間に所有関係が発生したと解釈せざるを得ないにもかかわらず、死者が歌を知覚することは不可能なため、不適格となる。

7) ここでは、to 前置詞句をとる格構文に限定して説明する。

8) イディオムの表現が二重目的語構文しかとれないことも、同じ制限によって説明できる。

(i) a. Give me a hand. (ちょっと手を貸して下さい)

b. He gave me his cold. (私は彼から風邪をうつされた)

(i) では直接目的語と間接目的語の間に「所有関係」が含意されるが、主語から間接目的語に物理的な移動が起こらないと考えられるため、与格構文は許されない。次のような軽動詞構文 (light verb construction) も同様である。

(ii) a. John gave Mary a kick.

b. *John gave a kick to Mary.

(iii) a. John gave the rope a pull.

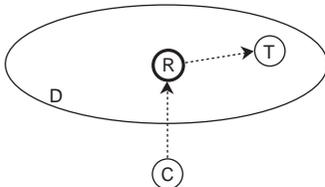
b. *John gave a pull to the rope.

軽動詞構文は、意味内容の軽い動詞 give が文の動詞として用いられ、実質的な行為の意味内容は a kick, a pull という動詞由来の名詞によって表わされている。動詞は主語から間接目的語への「転移」の意味を含意せず、与格構文は不可能である。

9) 二重目的語構文と与格構文を説明する場合、参照点構造という概念が必要である。我々が何かに言及する時、その対象に直接言及することはほとんどなく、ある物に注意を向け (メンタル・コンタクトをとり)、それを足がかりにして対象について言及するのが普通である。例えば「犬の尻尾」という場合、我々は「犬」を足がかりとして「尻尾」に注意を向けており、前者を参照点 (reference point)、後者をターゲットと呼ぶ。認知文法では、人間にこのような参照点をつくり出す基本的な認知能力が備わっていると考えられている。

このような参照点と指示との関係は (i) のように図示される。

(i)



(i) は、参照点の支配域 (dominion) において概念化者 C (話者及び聞き手) が参照点 R に注意を向け、そこからターゲット T へ注意や意識を向けること、すなわち概念化者が参照点を経由してターゲットと結ぶメンタル・

コンタクトを表わしている。このような関係を参照点構造と呼ぶ。

参照点とターゲットの関係が現われている言語現象としては、(ii) のようなメトニミーや日本語における二重主語構文 (iii) などがある。

(ii) a. She bought Lakoff and Johnson.

b. They ran out of the clock.

c. The car doesn't know where he is going.

(iia) では著者名を参照点としてターゲットである著書を指し、(iib) では時計という具体的な物を参照点として抽象的な時間をターゲットとし、(iic) では車を参照点として運転手をターゲットとしている。日本語における二重主語構文も同様である。

(iii) 太郎は鼻が低い。

(iii) は主語「太郎」を参照点とし、「鼻が低い」をターゲットとした参照点主語構文 (reference-point subject construction) と呼ばれる。

10) これについて Goldberg (1995) は、両者は意味論的に同義 (semantically synonymous: S-synonymous) であるが、語用論的には同義でない (P-synonymous) と述べている。

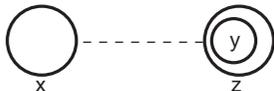
11) 例えば、典型的な文法的要素である「主語」は、具体的な叙述内容としては行為者、使役者、経験者などを表わしているが、スキーマとしては「認知主体が事態の中で最初に注目する参与体」という内容しか表わしていない。つまり、中村によれば、この意味規定は、我々が事態を認知する際、どれか1つの参与体にまず注目するという一般的な認知プロセスそのものである。

12) Newman (1996) では、動詞 give の意味は時空領域 (spatio-temporal domain)、力動領域 (force-dynamics domain)、コントロール領域 (control domain)、利害領域 (human interest domain) という4つの領域の総和からなる。しかし、「x が y に働きかけて y を移動させる」という力動ドメインと「x が y を z へ移動させる」という移動ドメインは一連の事象として捉えられるため、中村 (2001) は力動ドメインと移動ドメインを統合し、形式的には3つのドメインによって x sends z y. の意味を示している。

13) つまり、二重目的語構文における「所有」の含意が動詞の意味から独立して顕在化ようになるのがこの段階である。1節において二重目的語構文は間接目的語が直接目的語を「所有する」という含意を伝えることを説明したが、これは正に構文としての意味であり、「移動」という動詞の意味を反映する認知構造 (30) が否定されるわけではない。

14) 中村はさらに抽象化が進んだ段階として (i) を示している。(35)の段階では働きかけが抽象化されているが使役性がないわけではない。しかし、次の段階では抽象化された使役性も消滅している。

(i)



(i) では意味に具体性はなく、所有関係 (すなわち参照点関係) を認知する参照点能力と、主語参与体と参照点構造との関係を捉える関係認識能力とを基板とする認知プロセスを反映するのみになっている。中村によれば、英語にはこのような認知構造を持つ例は多くないが、envy, forgive をとる二重目的語構文の意味構造が (i) に対応する。

(ii) a. She envied him his freedom to travel.

b. We forgave him the unpleasantness.

(Cambridge International Dictionary of English)

15) ある構文が誕生するには通常、何らかの動機づけ (motivation) があると考えられ、新たな構文は既存の構文からの拡張であると見なされる。例えば、結果構文 Pat hammered the metal flat. と移動使役構文 Pat sneezed the napkin off the table. には「直接目的語とその補部」という形式的な関連性があり、「使役及び移動」という意味上の関連性も存在する。そのため、状態変化を位置変化からの比喩的拡張と見なすことで前者が後者に動機づけられていると説明される。

16) 中村は二重目的語構文と交替しない構文を 他動詞 + for 前置詞句 構文と呼んでいる。

17) Goldberg (1995) は、中村とは異なる継承リンクを二重目的語構文に対して提唱している。

(i) a. 'X CAUSES Y to RECEIVE Z':

Joe gave Sally the ball.

b. 充足条件が (ia) を含意:

Joe promised Bob a car.

c. 'X ENABLES Y to RECEIVE Z': permitted

Joe Chris an apple.

d. 'X CAUSES Y not to RECEIVE Z':

Joe refused Bob a cookie.

e. 'X INTENDS to CAUSES Y to RECEIVE Z':

Joe baked Bob a cake.

f. 'X ACTS to CAUSES Y to RECEIVE Z at some future point in time':

Joe bequeathed Bob a fortune.

(ia) が二重目的語構文の中心的意味であるが、その他はすべて多義性のリンク (IP link) によって中心的意味からの拡張として捉えられる。中村は動詞 bake の二重目的語構文をこの構文の抽象化の一段階と見なしているが、Goldberg では多義性のリンクによって説明される。18) 影山 (2001) によれば、このタイプの与格交替を示すのは例えば次のような動詞である。

(i) make a toy, build a house, fix a dinner, cook a dinner, bake a cake, call a taxi, knit a sweater, find a job

参考文献

- Dabrowska, E. 1997. *Cognitive Semantics and The Polish Dative*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Goldberg, A. 1989. A Unified Account of the Semantics of the English Ditransitives. *BLS* 15: 79-90.
- Goldberg, A. 1992. The Inherent Semantics of Argument Structure: The Case of The English Ditransitive Construction. *Cognitive Linguistics* 3: 37-74.
- Goldberg, A. 1995. *Constructions*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Green, G. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
- Gropen et al. 1989. The Learnability and Acquisition of the Dative Alternation in English. *Language* 65: 203-257.
- 影山太郎. 2001. 『動詞の意味と構文』大修館書店.
- Langacker, R. W. 1986. An Introduction to Cognitive Grammar. *Cognitive Science* 10: 1-40.
- Langacker, R. W. 1988. An Overview of Cognitive Grammar. In Brygida Rudzka-Ostyn, ed., *Topics in Cognitive Linguistics*: 3-48. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. 1993. Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1-38.
- 中村芳久. 2001. 「二重目的語構文の認知構造 - 構文内

ネットワークと構文間ネットワークの症例 - 』『認知言語学論考』山梨正明他編 59-110. ひつじ書房.

Newman, J. 1996. *Give: A Cognitive Linguistic Study*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Oehrle, R. T. 1976. *The Grammatical Status of the English Dative Alternation*. Ph. D. dissertation, MIT.

Pinker, S. 1989. *Learnability and Cognition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Tenny, C. 1987. *Grammaticalizing Aspect and Affectedness*. Ph. D. dissertation, MIT.